

工藤原武夫集

全十卷

岩波書店刊



桑原武夫

私は学問をしてきた人間だが、狭い専門領域に蟄居することを好まず、およそ人事のすべてにインタレストをもち、広く読書を楽しみ、深く人と交わり、都会にも山岳にも、国の内外に旅を試みた。それらのいとなみのすべてを包含するものをば自分の学問と心得てきたのである。また私は文章を書くことによるこびとささやかな誇りを見出してきた。この『桑原武夫集』は、そうした学人の集である。すなわち一九三〇年から今日までに私ので書いた文章のうちから主要と思われるものを自選して、これをすべて年代順に配列して十巻を構成したもの、半世紀にわたる私のエクリヴァンとしての軌跡がここにある。幸いに清鑑をたまえ。

刊行の辞

文は人であるとともに、時には行為そのものである。桑原武夫先生の半世紀に及ぶ文業は、フランス文学研究の蓄積に発し、旺盛な知的関心の赴くところ古今東西の文化にわたり、同時代の社会動態と関連して、開かれた思想と人間性の発現に終始された。対象は登山や旅行の記録を含む各分野に拡がり、文体もまた多彩である。先生自らの選によるこの集大成を、「著作集」と呼ばずして、「集」と名づける所以である。

先生の文筆活動は、一九三二年、雑誌『思想』に発表された先駆的論文「スタンダールの芸術について」をもって嚆矢とする。四一年刊のアラン『芸術論集』の翻訳、留学体験を記した『フランス印象記』にみる清新なヒューマニズムは、戦時下の読者に深い感銘をあたえた。四三年、『事実と創作』においては、世にさきがけて富岡鉄斎、柳田国男の業績に新しい知見をもたらされた。

諸学につき一家言をもつ先生は、戦後、日本文化のあり方をめぐってさまざまな提言を行われた。四六年、『世界』に「第二芸術」を発表し、俳歌壇の守旧的姿勢に痛烈な批判を加えた。一方、先生は、『文学入門』などの啓発的な仕事とともに、文学・思想・文化・歴史・教育など現代の文化全般にわたって精力的な批評活動を展開された。また先生の間への積極的関心は、表現の妙味と相俟って、すぐれた『人間素描』となって結実した。

先生は共同研究の先駆的組織者でもあった。四八年、京大人文科学研究所教授となり、六八年に定年退官するまでの二十一年間に共同研究を主宰し、それらの成果は、『ルソー研究』『フランス百科全書の研究』『フランス革命の研究』『中江兆民の研究』『文学理論の研究』として、小社より刊行された。

組織者としての先生の活躍は、知的行動の面のみではない。学生時代の登山体験は、五八年、五十四歳にしてヒマラヤの高峰、チョゴリザ遠征の隊長として登頂にみごと成功、稀に見る実行者としての力を示され、異色ある記録を残された。旅行家としてもまた、足跡は世界の広い地域に及んでいる。

本集は、このような先生の全業績のうちから、編年編集の十巻を構成し、各年代に関連した自跋を付することによって、一知識人の軌跡を描くものとなっている。八〇年代を迎え、同時代への関心の高まりつつある現在、世代をこえてこの試みが広く受け入れられることを願ってやまない。

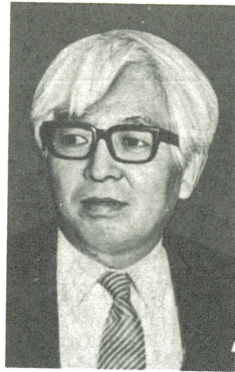
一九八〇年三月



■ 吉川幸次郎

一つの総合

あだかも一九三〇にはじまる半世紀のエッセの堆積、主題の多くは、人間認識にあり、そこからひろがる文明論にある。研究者としての出発、フランス文学にあつたのは、当時としては反骨であり先見であつて、スタンダールを発見し、ジュリアン・ソレルを発見した。ついでにフランス留学は、アランを発見したのみにない。「フランス印象記」が、多くの読者とあいまみえる最初となつた。一方、当時の人人の閑却する中国とも、家学のゆえに接觸の機会に富んだ。「演義三国志」数百の人名を、幼にして掌に指したのにはじまり、杜甫、魯迅、郭沫若。また父君桑原隲藏を含んで、内藤湖南、狩野君山、西田寸心、大正学術史の巨人たちの肖像。かくてやがて「文学入門」。読者のための文学論は、芸術の社会的効果を重視する。実践者としての出発が登山にあつたことは、山そのものと共に、登る仲間への認識となり、のちいくつかの共同研究の主宰者となる素地を作つた。その別の延長が、有能な旅行者として、地球の各域への遊記を生んだこと、明の徐霞客の規模を拡大する。いくつかの文明への遍歴のゆえに、ある時期には、祖国の伝承への批判者であつた。しかし「日本は小国でない」。その公平な擁護者である。単なるナショナリズムでない。一つのシンセシスと受け取れる。



■ 司馬遼太郎

常に世界を内蔵している

この思想家の場合ほど、人の住む地球というものを、こよなく愛しぬいている例を多くは知らない。その知性には、ときに美的な、つねに思想的な、しばしば現象的な、さらには歴史的な地球社会への思考が密度高く詰まっていた、なにごとかに触発されたとき、それらぼう大な量の思考の諸要素が、緻密に作動しあい、叙述にむかつて動きだすのである。裏通りのささいな事象についても、この思考力は世界意識というものの網をいったんはかぶせてみることなしには、見ようとはしない。見ることがこの思考力の場合、激烈な行為であることは、その文章にしたたかな発汗のぬめりを感じることによつて、十分に察することができる。

その叙述は、力学的な論理構造によつて構築されながら、気体のような観念の壁面や床面を好まず、すべて実材をもつて充たされている。われわれ読者は、その一つ一つの実材の選択のなかにこの思考力の煮つまつた作業があるということを見ぬかねばならない。ときに実例は些々としている。その背後に重大な観念世界があり、その例が、そのことの象徴であると感じることができた場合、この文章を読むよこびはいよいよ大きくなる。

どの章のどの一句でもいい、試みにひらいて、そこに世界を内蔵していないような文章が一つもないことにおどろかされるのである。

ひるがえつて思うと、日本社会が、この具象性に富んだ思想的文学者を持つたこと自体、ふしぎなことには属するのではないか。



■ 鶴見 和子

たたなわる 比較の視座

桑原さんは、比較の達人である。桑原さんは、プラグマティストを自任する。創造的知性は、プラグマティズムの本領である。桑原さんは、独自の比較の方法を練磨しつつ、その方法をもって、つねに自己および他者——共同研究者、読者、国内国際会議同席者、その他のすべての対話者をふくむ——の創造的知性を刺戟し、開発してこられた。これからも、何がとび出すかわからないところが楽しみなのである。

幼時に父君の肉声をもって伝えられた『三国志通俗演義』が桑原さんのうちに生きている。そのことが、中国をもって日本を考え、中国文明をもってフランスをはじめとする西欧文明を見る拠点となった。こうして相対化された、ヨーロッパと日本とをくらべあわせる。ヨーロッパを普遍的な手本とする日本人学者の陥りやすい偏見から桑原さんが自由なのは、そのためであろう。さらにアジア、アフリカの発展途上国を旅することによって、アジア、アフリカ諸国をもってヨーロッパを見、日本をかえりみる視点をもかくとくする。桑原さんの思想が独創的であるのは、比較の視座の組み立てが重層的であり、かつ視座の相互転換が自在きわまらないことによるのだと思う。

『桑原武夫集』は、作品を年代順に並べ、自選自註であるのが魅力である。わたしたちはそこに、桑原流たたなわる比較方法論の形成と、日本における卓抜した創造的知性の展開との、相互関連の秘密を解くカギを見つけることになるだろう。



■ 野間 宏

鷹の眼 駱駝の足

桑原武夫はじつに優れたフランス文学者である。しかし決して所謂フランス的せん細、優美にとどまることなく、むしろ「美的なもの」を破ろうとする真の創造的フランスに迫ろうとして、若い時から全力をつくし、いまなお、それを持続している。桑原武夫が問い尋ね、さがしあてているものは、言葉とイメージとをもって、いかなる事物・人間・状況をも、その内と外とを統一して把え、開いて行く強靱な力なのである。その力はその前をさえぎるものが、どのように巨大なものであれ、決して退くことなくすすみ、その自由を自分のものとする生々とした力である。

桑原武夫の文章を論じるのに、その足の問題を欠かすことが出来ないと言え、滑けいに思えるかも知れない。しかしこの人の着眼がまことに鋭いと同時にその足がその身を如何なる角度にも支えることが可能であることをいわずにおくことは出来ない。桑原武夫はいわゆる学者のような書齋人ではなく、またたんに実証主義者のように、事実にあたり、それをつみ重ねるところにとどまるものではない。空を飛ぶ鷹の眼と陸を駆ける駱駝の足をもとにそなえているこの人にして、はじめてその文章は成ると私は見るのである。

桑原武夫は若くして登山をはじめ、何度も死に接しきびしいカラコルムの処女峰チヨゴリザ登山隊の隊長として登頂に成功し、いまなお登山者であり、独特の実行者なのである。このことと桑原武夫の文章、文学とのかかわりは深い。私は以前、「桑原武夫をいく度となく反読し、単一のモニユメントのようにそれを把えること」と、書いたが、いまも、そのことを心から感じとる。

第一巻 一九三〇——一九四五

杉本秀太郎

(一九三〇)尾上郷川と中ノ川 (一九三二)スタンダールの芸術について／積雪期の白根三山 (一九三三)スタンダール (一九三四)虚子の散文／服装と行爲／山岳紀行文について (一九三五)あの頃のこと／小説の読者／富岡鉄斎展を見て (一九三六)能郷白山と温見／湖南先生 (一九三七)『遠野物語』から／パリの公園／フェアブル博物館 (一九三八)ブルターニュ紀行 (一九三九)パリ大学開講式／文学的フランス／アラン訪問記／パリの本屋など／早春日記／ドイツ紀行／ラシーヌへの道／ニームの闘牛 (一九四〇)美術品の防衛／山遊び／慰戯としての文学／『古史弁自序』を読んで／鈴鹿紀行／キーツの墓／フーレ先生／コンパニョナージュ (一九四一)アメリカ大陸／黒人街／モンテニユの城／スタンダール遺跡めぐり／政治遊戯／芸術家の実生活と作品／戦時下の登山／鳥の死などとする (一九四二)展覧／詩人／二十年前の三好達治君／歴史と小説／登山の文化史／『クレイヴの奥方』について／『三国志』のために／ざくろの花 (一九四三)書物について／五十マルク札／外国文学研究への反省 (一九四四)ヴァレリーの『スタンダール論』／現代フランス・ヒューマニズム／町一番の風呂 (一九四五)西田先生の一面

第二巻 一九四六——一九五〇

(一九四六)趣味判断／文学修業／日本現代小説の弱点／断想／ものいいについて／フランスの左翼作家／プーデル雑誌／文芸俗話／西洋文学研究における孤立化について／アランの政治思想／第二芸術／三好達治君への手紙 (一九四七)短歌の運命／洞察について／谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン／横光利一氏の『秋の日』／芭蕉について／パリの下宿／マルロー研究／ずり落ち／反訳について／文学における伝統 (一九四八)地方文化私見／織田作之助君のこと／フランス文学におけるドイツの影響／君山先生／やむを得ぬ滅亡／『イタリヤ絵画史』のスタンダール／スタンダールの世界文学賞／エコール・サントラル精神／『ヨーロッパのニヒリズム』／仙台を去るにあたって (一九四九)歴史と文学／戦後の宮本百合子／伝承問答／高原の幸福／法隆寺の壁画／平和の発見／文学者と酒／人間認識／フランス的ということ (一九五〇)人間の戦い／素朴ヒューマニズム／読みそこない／文学批評について／書評のない国

人を評論家といえるには、世間に衝撃をあたえるような観察と指摘を、よく引締った文章で言い表わすからだが、その人になければならない、しかもその文章が時宜しきを得て世間の目にふれるということがなければいけない——私はこれを桑原武夫による評論家の定義として記憶している。なにかの折りに桑原さんの直話のなかで、私はこれを聞いたのであった。

当の桑原さんがまず一番先にこの定義にあてはまる評論家なのがおもしろい。昭和二十一年の「第二芸術論」が、上の定義の実行であったことは、だれの目にも明らかだろう。

しかし、世間に打って出ると、その報いとして世間から取りちがえられるということが起こる。桑原さんは近代主義者ということになり、それでさながら百万の味方を得たように思った人もあれば、厄介な当面の敵を見てにがい顔をした人もあった。どちらの人も、今では平気な顔にもどっているにちがいない。文事は只今、我国では、万般にわたって繁昌しているかにみえるから。

桑原さんはどうかという、今も当時とことならず、眉間のあたりに多少の愁いをうしなわず、顎骨

第三卷 一九五〇——一九五三

〔一九五〇〕文学入門 〔一九五一〕鷗外と不俗／宛名のない手紙／私の讀書遍歴／ルソー研究序言／ルソーの文学／アラン／伝統／北海道断想／ヘミングウェイ「武器よさらば」／あくまで平和を／西洋文学研究者の自戒的反省／ジツドの死をきいて 〔一九五二〕人間性の試金石／今日における歌舞伎／漢文必修などと／丁玲における尖鋭さ／南方熊楠の学風／パスカルの時計のパンセの「解釈」 〔一九五三〕予想あそび／日本映画の成長／杜甫の「贈衛八处士」について／三好達治の『測量船』について／魯迅評論集を読んで／文化遺産のうけつぎ／みんなの日本語／家元制についての私的感想／外国人を招くことについて／伊東静雄の詩／文学とはなにか

第四卷 一九五四——一九五六

〔一九五四〕考史遊記／平和運動と誓い／アマクチの流行／柳亮三郎先生のこと／文学批評と価値判断／『百科全書』の芸術論／啄木の日記／『七人の侍』／旧友の文章／日本知性への注文／敗戦前後／自己解説／学問を支えるもの／しろうと農村見学／トルストイ「戦争と平和」入門／河上肇「自叙伝」 〔一九五五〕近松物語の感動／ソ連の宗教／アルメニア紀行／シヨロホフ五十の賀／ソ連・中国の乾燥性／四川紀行／社会主義国の女性雑感／読書 〔一九五六〕日本文化論のあり方／明治の再評価／博雅の土貝塚茂樹／漢の高祖の「大風歌」について／恐怖政治の大使・サン・ジュエスト／歴史における人間の尊重／幼いころの絵本／森外三郎先生のこと

第五卷 一九五七——一九五九

〔一九五七〕ニアリング夫妻との一夕／ノーマン博士の思い出／『大菩薩峠』／芸術の社会的効果／日本的とはなにか／西堀南極越冬隊長／郭沫若氏の一面／『明治大帝と日露大戦争』／国際ペン大会の印象／伝統と近代化 〔一九五八〕『楊州八怪』から／河野学派の落第生／第一級の文化論／美人観を調査する／国文学のあり方 〔一九五九〕チョゴリザ登頂／科学技術時代と古典の運命／現代日本における古典のあり方／ナシヨナリズムの展開

のあたりにはなお客気を匂わせ、白いものがいちじるしく数を増したとはいえ、東風にも、西風にも、その頭髮は敏感にふるえることをやめないで、打見ただけでも、桑原さんの内面には、互いに対立しあうもの、遅速その度合いを一にしないもの、新旧、表層と深層、そういうものが今もひしめいていて、桑原さんに安逸を許していないことがわかる。

かようにいうと、桑原さんには心の休まるいとまもないに聞こえるが、それはそうでない。ぼんやりしていると疲れる人がある。そういう人は、ひとつのことに疲れると、別のことをしてその疲れを除くすべを心得ている。桑原さんもそういう人で、ほかでもない『桑原武夫集』十巻の内容多岐にわたる文章がこれを証明する。生きて動いている人間の大好きな桑原さんが、展墓というものを好まれるのもあるいはこれは先考桑原隲蔵先生の家風を継がれたというばかりではなくて、これまたわが武夫先生の休息の秘訣と受取るべきかもしれない。活動的な桑原武夫はよく知られているが、観想的な桑原武夫を人は見のがしがちであった。

すぐれた能力をそなえている人には、年齢にかかわらず、無邪気なところがある、とアランがいつている。桑原さんその人に接していても、その文章に接していても、アランのこの言葉を私はよく思い出す。笑いをさそう奇行奇言またなきにしもあらず。しかも、容易に人にだまされないので、桑原さんのこわいところである。

第六卷 一九五九——一九六四

〔一九五九〕研究者と実践者／日本の教育者／叱るということ／ケンソン／眠り上手
 九六〇〕一九六〇年論壇時評／日本は小国ではない／ひとはいき／宇宙時代と古典／訪米
 雑感／人を知る明のない先輩／伊勢神宮の国有化／ジャワの十日間／私のノンフィクション
 ／安保阻止運動／青年の冒険精神／永井荷風／シロホフ『静かなドン』(一九六二)中野
 重治をめぐる雑談／ナシヨナリズム論について／日本文化の考え方(一九六二)日本
 文化雑感／仲間的結合／存在としてのインド／大正五十年／インド史学界の新巨星／ロー
 マ字新聞／シンポジウムに招かれての感想／緑のしげみ／柳田さんの一面／ルソー思想の
 世界への浸透(一九六三)パワール・ポリチックス／アフリカひとのぞき／松本清張の文学
 ／インド・ネパールの旅／現在も生きる心情(一九六四)狩野先生逸事／後進国問題の考
 え方／おやじ／錬金術師の早技／ベンガルの槍騎兵

第七卷 一九六五——一九六九

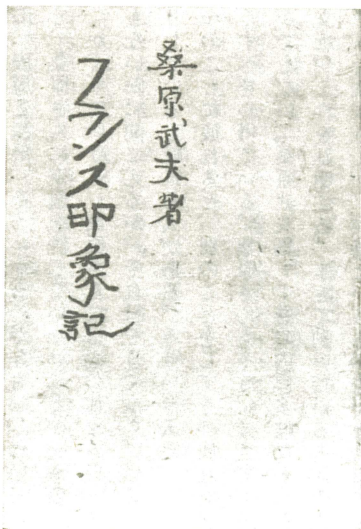
〔一九六五〕近代日本における歴史学／ある明治のナシヨナリスト／萩原朔太郎の庭見物／
 ベトナムについての感想／憲法第一章についての感想／ふたたび江刈村へ(一九六六)和
 魂洋才の変転／人間中江兆民／名を知っているということ／ふるさとを行く／心の痕跡／
 今西錦司論序説(一九六七)東北の可能性／明治百年を迎えて／ころづくし／小島祐馬
 先生をしのぶ／桂春団治序にかえて／近代化における先進と後進／文学価値論(一九
 六八)西洋崇拜からの脱却／私のなかの中国／人民史家ミシュレ／ヨーロッパと日本／人
 文科学における共同研究／読書と観察者／仙台の五年間／中天に輝く球体／桑原隲蔵小
 伝／父の手帳(一九六九)現代社会における芸術／日本の百科全書家新井白石／トレギエ
 の二週間／トレギエから

第八卷 一九六九——一九七四

〔一九六九〕思い出すこと忘れえぬ人(一九七〇)プータン入国記／一致と影響／創刊一〇〇
 〇〇号を迎えて／矢野仁一先生のこと(一九七二)三上章を惜しむ／流行言／ヨーロッパ

著者略年譜

- 一九〇四年 福井県敦賀に生る
- 一九二八年 京都帝国大学文学部フランス文学科卒業
- 一九三七—三九年 フランス留学
- 一九四八年 大阪高等学校、東北大学を経て、この
 年京都大学人文科学研究所教授となる
- 一九五八年 カラコルムのチヨゴリザ登頂
- 一九五九—七二年 日本学術会議副会長
- 一九六八年 京都大学を退官、名誉教授となる
- 一九七七年 芸術院会員となる
- 一九七九年 文化功労者となる



著者の処女出版『フランス印象記』表紙。
 一九四一年刊。

次頁右から

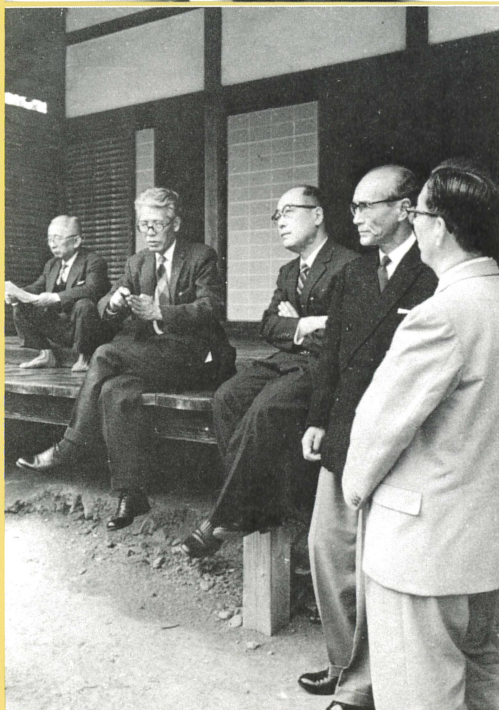
「第二芸術」。『世界』一九四六年十一月号。
 中野重治追悼原稿。一九七九年

スタンダールの芸術について

1

スタンダール(アンリ・ベール)は生きているうちから、自分の墓碑銘を選ぶのが好きであった。これは、彼が百七十一もの変名を使ったのと同じ好みのあらわれで、自分自身を外側から見たい、そして、少しでもよけいに自己を味わいたいというところから生まれたものに違いないが、その理屈はともかく、幾通りにも書いたその墓碑銘で、いつも変らぬのは、あの誰もが知っている *Beyle, Milanese, visse, scrisse, amò*(ミラノの人、ベール、生きた、書いた、恋した)の一句である。いかにも大袈裟なもののようにだが、彼の一生を知っている人なら——たとえば小説以上に面白いといわれるポール・アザールの『スタンダール伝』でも読んだことのある人なら——この三つの重大な言葉を彼以上に正当に、彼以上の実感をこめて言いうる人は稀れだと思うに違いない。スタンダールは何よりもまず比類なき生活者である。かの言葉のみ美しくして生活のない群小作家と、彼はまずここにおいて峻別される。

しかしそのことから、彼の実生活の経験の豊富さが、すぐさまかの大作を生むにいたった原因で



上右：1907年、著者と父。 上左：1955年、訪中、郭沫若氏と。
 下右：1958年、チョゴリザ登頂。
 下左：1962年、科学者京都会議。
 左から宮沢俊義、著者、湯川秀樹、谷川徹三、坂田昌一の各氏。

予約申込規定

■頒布方法

全十巻。予約申込者にのみお頒ちします。分冊申込みのお求めには応じかねます。

■申込期限

一九八〇年六月五日まで

■申込方法

申込期限までに添付の申込用紙により、最寄りの書店へお申し込みください。(お取りつけの書店がない場合には、直接岩波書店へお申し込みください。ただし、一巻につき送料二五〇円を申し受けます)

■刊行期日

一九八〇年四月十八日に第一回配本。以後毎月十八日に一冊宛、巻数順に刊行し、一九八一年一月に全巻を完結する予定であります。

* * *

■体裁／四六判布装上製函入／本
 本特漉上質紙使用／平均六〇〇頁
 ／9ポイント活字組／各巻口絵一
 葉／月報付／予価各巻四〇〇〇円